

6. 地域を知ることが防災につながる

日常的に自分が生活している地域がどんなところなのかに関心を持つことはそう多くないと思います。大きな地震で、地域の地盤が大きく変形したとか、崩れたとか、液状化したというような明らかなことがあれば、そもそもどんな地盤なのかに関心を持つことだと思います。都市部では多くの土地には長い歴史があって、原地形をそのまま居住域にしている例はまれで、盛土をしたり、切土をしたり、かつての未利用地を変えたりとさまざまに原地形を改変して生活環境を形成してきています。

表面はさまざまなもので覆い尽くされてはいますが、実はその下には過去の長い歴史や地形地質特性が隠されています。そして、時に地震や豪雨と言った大きな外力にさらされると、それらのものが顕在化して地表のものへ被害を発生させることもあります。つまり、災害でこれまで見えていなかったものが見せてくるものでもあります。

長い人間の歴史の中で、多くの自然災害を経験したり見てきたりしているわけですが、その大きさに恐れを感じ、後世に伝えておきたいと義務感が芽生えモニュメントや日記などで災害の記録が残されています。あるいは地名で表現していたり、神社を建立して鎮守を祈願してくれています。土地にはそれぞれの特性があり、それが災害につながることもあるということを示唆しているわけで、後世の人がそれを無視すると言うことはこれまでの地域文化を喪失させることにもなります。地域文化には防災への知恵が含まれていることも多く、災害列島で暮らしてきた貴重な教訓もあります。

地域を知ると言うことは、さまざまな土地の歴史、暮らし方を知って、そこから学習すべきことを見つけるという作業でもあります。ややもすると、科学技術がすべての頂点にあるような無謀な行為は、その後に弱点を突かれて自然災害を招くことにもなり、そのときは自然災害ではなくて人為災害になると言うことも知っておくべきでしょう。

800 万年も掛けて生成した丘陵地を一瞬にして崩し、谷部に埋め込んで山地と一体化し、一様な地盤が造成されたようには見えても、切土部と盛土部をまったく同じ物性に仕上げることは不可能なことです。そのようなものの境界は必ず、幾多の自然現象の洗礼を受けます。もちろん、このような開発は生活する上での必要なこともありますが、自然のものと人工物はまったく性格が違うと言うことを認識した上で、自然を活用することを忘れてはならないと思います。そこにリスクマネジメントが必要となるわけで、それをすることで完璧ではなくても、被害や犠牲を最小にすることはできると思います。地域の災害リスクを理解して、その前兆に敏感になり、直観力が働くことが、実は防災で一番に求められるもので、ハード対策で十分だと言うことでの慢心は、逆に大きな災害を招くことにつながります。

よく災害の後に、あれだけの構造物があったのでまったく安心していた、これまで聞いたことがない、数十年何も無かった等と聴きますが、自然のシステムと人間の時間軸が違います。

しかし、地形は自然の営みの歴史を残してくれています。河川の形状や周辺のさまざまな

地形、土地利用、古人の水制への工夫、土石流で形成された緩傾斜地などは、まさに災害遺跡ともいえるもので、そこから多くの教訓を知ることができます。しかし、われわれは、少し勢い勝って、それらを見向きもせず勝手な行動をしてしまっていることがあります。そうになると、時に地震や豪雨などで大きな災害を呼び込んでしまうことが近年続いています。自然災害は、地形災害でもあり、どう地形を読み取って利用するのが重要で、一時の利便性や経済性だけでの判断は極めてリスクを負うということを、まさに他山の石としたいものです。